

上座部の共業 (sādhāraṇa-kamma) について

——ダンマパーラ以降——

林 隆 嗣

上座部では、聖典段階から初期蔵外文献、そしてブッダゴーサに帰せられる註釈文献に至るまで、環境世界の説明に共業の概念を用いず、業果の共有を認めない立場を堅持してきたことは、前稿「上座部の共業 (sādhāraṇa-kamma) について——聖典からブッダゴーサへ——」『印度學佛教學研究』第五十九卷第一号において論じた。ブッダゴーサは、大地などの自然環境や自然現象は「時節等起 (utusamutṭhāna)」に分類し、天界の事物、輪宝、世界再生時の原初状態である寶石の大地、シネール山の麓にあるアスラの住処(宮殿)など特殊な現象や環境は「業縁時節等起 (kammaccaya-utusamutṭhāna)」に分類する。ところが、ブッダゴーサに続くダンマパーラの文献では、環境世界や諸現象の原因を説明するときに、これまで否定され、頑なに使用されなかった「共業」が突然現れる。しかも、この概念は、上座部で容認・継承され、様々な文脈で使用されていくことになる。本稿では、これらの用例を検証しながら、ダンマパーラ以降、近代の上座部仏教圏の思想にもつながる「共業」の意味を考察する。

1. ダンマパーラ

① 〈月や太陽を動かす風輪〉 *Vimānavatthu* の註釈 (Vv-a) では、月や太陽の運行に関して、天界を走り抜ける車宮 (rathavimāna)¹⁾ どもの動力因に着目し、運搬獣の姿をした天子 (devaputta) が描かれることがあっても、宮殿の進行時に特殊な機縁となるのは実は内的な風界 (abbhantarā vāyodhātu) であると述べる。さらに、この月や太陽の宮殿 (candavimāna, suriyavimāna) を動かす風輪が、共業の結果として生じたものであると言う。日月の運行に関する類似説は俱舍論にも見られるが、共業による解釈は、上座部大寺派の現存パーリ・アッタカターの中でこれが初めてで、唯一の用例であると思われる。

つまり、例えば月の宮殿、太陽の宮殿などが地域の果てに行くとき、それを享受して生きる生き物たちの共業によって生じた (tadupajivinaṃ sattānaṃ sādhāraṇakammaṃnibbattaṃ),

極度に急速な速さの大きな風輪がそれら (宮殿ども) を推進して動かす. (Vv-a 15)

②〈海上の宮殿を支える水〉 *Majjhimanikāya* の *Māratajjanīyasutta* (no.50, MN i.337) において、「みずうみの中央に、一劫の間とどまる宮殿どもが立つ (*majjhe sarassa tiṭṭhanti vimānā kappathāyino*)」とあり、水上に聳える美しい宮殿でアブサラスたちが舞い踊る様子が述べられているが、ブッダゴーサの註釈 (Ps ii.422) では、その宮殿が大海の中央にあって、水を基盤にして (*udakaṃ vatthuṃ katvā*) 立っていると解説する。ダンマパーラの復註では、この不思議な宮殿が海に沈まず、水に支えられているのは、この宮殿に生まれる生き物たちの共業の結果であると述べる²⁾。

「水を基盤にして」とは、そこに再生する生き物たちの共業の結果により (*tattha nibbattanakasattānaṃ sādharmaṇakammaphalena*)、専ら大海の水を拠り所となしてから. (Ps-pt Be ii.323)

③〈アノータッタ湖の沐浴場〉 MN の *Potaliyasutta* (no.54, MN i.359ff.) という経典は、アングッタラーパという地を舞台としている。この地名の由来に関連して、註釈はアノータッタ湖に言及し、さらにそこには心地よい踏み石をもった沐浴場がよく設置されている (*nahānatitthāni supaṭiyattāni*) と述べる (Ps iii.36, Mp iv.108-109, cf. Pj ii.438)。この箇所について、ダンマパーラの復註は、この沐浴場の設置が共業によるものと補足する。

「よく設置されている」とは、それを享受する生き物たちの共業の威力によって (*tadupabhogisattānaṃ sādharmaṇakammānubhāvena*) よく設置されている、よく転現している. (Ps-pt Be ii.20, cf. Mp-pt Be iii.228)

④〈地獄の区画〉 MN の復註には、共業による説明がさらにもう一箇所存在する。*Bālaṇḍitasutta* (no.129) には、大地獄に関して、「四隅があり、四つの門があり、区分されていて、等しい部分に区画化され、鉄の壁に包囲され」(MN iii.167) という一節がある。この箇所に対するブッダゴーサの註釈 (Ps iv.213) は言葉の言い換えで済ませているが、ダンマパーラは、さらにこの地獄の区画が共業によるということを補足している。

「区分けされている」とは、そこに再生する生き物たちの共業によって (*tattha nibbattakasattānaṃ sādharmaṇakammunā*) 区分けされているかの如く生じている. (Ps-pt Be ii.353)

これら復註での補足箇所から、ダンマパーラ自身、あるいは教団にとってブッダゴーサの註釈文が十分ではなく、それぞれの発生原因を明らかにする必要が生じたことが伺える。しかも、共業と関連付けられた現象は、我々の目の前にある

ありふれた自然環境ではなく、日常で体験できない特殊な環境や特別な働きや能力を持った事物、つまりブッダゴーサの分類で言えば「業縁時節等起」に相当するものばかりである。

⑤〈通常の雨・寒・暑・風〉さらに、従来の解釈によれば単なる時節等起に分類されるはずの降雨についても、ダンマパーラの復註では「共業」によって生じるものとみなされている。Samyuttanikāya (SN iii.254ff.) には、ヴァラーハカ (雲) 衆と称する神々 (Valāhaka-kāyikā devā) として、シータ (Sīta-valāhaka, 寒雲), ウンハ (Uṇha-v., 暑雲), アツバ (Abbha-v., 暗雲), ヴァータ (Vāta-v., 風雲), ヴァッサ (Vassa-v., 雨雲) という五種が挙げられている。その中で、ヴァッサヴァラーハカという神々は心誓願によって雨を降らせるという (SN iii.257)。ここで、ブッダゴーサの註釈は、降雨現象について新解釈を提示する。

「雨が降る」とは、およそ雨季の四ヶ月での雨、それは他ならぬ時節等起である。しかし、雨の真最中での過剰な雨、そして Citta-Vesākha 月 (= 乾季) における雨、それはまさに神々の威力によって生じたものである。(Spk ii.351, cf. Mp-pt Be ii.30)

つまり、ブッダゴーサの註釈では、通常の自然のサイクルの中で降るべき時期の雨を「時節等起」と規定し、そうでない異常な豪雨、あるいは雨季の雨ではない季節はずれの時ならぬ雨の場合が、神々の力 (devatānubhāva) による降雨であると区別する³⁾。ダンマパーラの解釈は、そこからさらに分析が進む。

「それは時節等起だけである」というのは、食物を享受して生きる生き物たちの共業に依存した時節等起 [の雨] だけである (āhārūpajivinaṃ sattānaṃ sādhāraṇakammūpanissaya-utusamuṭṭhānam eva)。時節等起の寒・暑・風についても同じ理屈である。それもまた、食物を享受して生きる生き物たちの共業に依存した [時節等起] のみである。(Spk-pt Be ii.277)

ダンマパーラは、聖典の事例 (神々による降雨) ではなく、ブッダゴーサが示した前者のケース、つまり、時節等起で発生する通常の雨に関して「共業」の語を加えて解説している。さらに、他のヴァラーハカ衆についても、ブッダゴーサは、上記の降雨の註釈と同じ理屈で、寒冷・熱暑・暗闇・風もすべて時節等起と神々の力とに区別するが、ダンマパーラは、これら自然の雲がもたらす寒暑や風についても「共業に依存した時節等起」と解釈している。

ブッダゴーサの段階では単なる「時節等起」と解釈されたものを、わざわざ復註で「共業に依存した時節等起」と修正した意図を考えると、雨や寒暑などが他の現象とは異なり、それ自体が生き物にとって苦楽を感じさせ、幸不幸に繋がる

という共通点が浮かび上がる。このことは、一見関連性を見出し難い、①から④までの特異な環境世界や現象と⑤の自然現象にもあてはまる。つまり、そこに住む生き物に苦楽を与えることが顕著であることから、このような環境や自然現象が、業の果報と理解されたことがわかる。

⑥〈業生色〉 *Visuddhimagga* の註釈 (復註) *Paramatthamañjūsā* (*Vism-mht*) もダンマパーラ作と言われているが、ここにも共業による説明が存在する。

眼根 (視覚能力) を始めとする五根などは、業生色 (業等起色) に分類され (cf. *Vism* xiv.79, xx.28, etc.), *Vism* xiv 37 では、色蘊の眼を定義するなかで、「見たいという性質を因縁とする業生の [大] 種」が眼の足場 (*padatṭhāna*, 直接原因) であると説明する。その註釈のなかで、ダンマパーラは共業の概念を用いる。

「[眼は] 見たいという性質を因縁とする業生の [大] 種を足場とする」, [つまり] およそ大種どもには浄がある, 他ならぬそれら (諸大種) は, これ (眼) にとっての近い因であるとなして, そしてこの場合, それぞれの自己存在 (身体) をもたらす共業によって (*taṃ-taṃ-attabhāvanipphādakasādhāraṇakammavasena*) 最初に眼の特徴が述べられている。特殊な原因が触れられていないから (他とは異なるそれだけに特有の原因が考察されていないから)。 (*Vism-mht* Ie ii.969)

Dhammasaṅgaṇi の復々註 (*As-anuṭ*) もまた、伝統的にダンマパーラの著作とされているが、註釈 *Aṭṭhasālini* における眼の定義⁴⁾ に関して、復々註は「自己存在をもたらす共業 (*attabhāvanipphādakasādhāraṇakamma*)」に言及している (*As-anuṭ* Be 157, Ie 253)⁵⁾。

生き物の身体は、成長の過程において様々な要因で形成されるが、*Vism* xx.22 に「すべての生き物たちの色が転現するとき、最初に業から転現する」とあるように、最初の身体形成は前世の業による。輪廻の中で特定の状態に再生するとき、共通した業による共通の結果として、それぞれの生き物特有の身体 (*attabhāva*) が発生することを、ダンマパーラは「共業」という概念を用いて説明しているのである。

2. マハーナーマ

6世紀の註釈家マハーナーマによる *Paṭisambhidāmagga* の註釈 (*Paṭis-a*) にも、共業による説明が存在する。

諸根と結びついていない色なども観察 (*vipassanā*) をもつ (観察の対象となる) ものである、それゆえ、それらが「業から発生したもの」の語句にまとめられていると理解さ

れるべきである。なぜなら、それら(諸根と結びついていない色など)もまた、すべての生き物の共業を縁とし時節等起するものであるから (sabbasattasādhāraṇakammaṃpaccaya-utusamuṭṭhānā)。しかし他の人々は「諸根と結びついていない色などは、観察にふさわしくない」と話す。しかし、それは、「すべて形成されたものは無常であると、智慧によって見るとき、そのとき」(Dhp 277) 云々という聖典に反する。(Paṭi-a i.290)

ここで「諸根 (indriya) と結びついていない色」とは、山や大地や海や樹林といった視覚能力などを持たない物質的存在を指す⁶⁾。禪定における観察 (vipassanā) の対象が、自己の身体だけでなく、外界にも及ぶか否かを議論する際に、彼は外的な事物を「共業縁時節等起」と説明する。しかし、恐らくマハーナーマが考案したこの造語は、他の文献にまったく見られないことから、残念ながら上座部の術語として定着しなかったと思われる。

3. サーリプッタ

① 〈アノータッタ湖の沐浴場〉 12世紀のサーリプッタの著作⁷⁾とされる Vinaya の復註 *Sāratthadīpanī* (Sp-ṭ) に、アノータッタ湖の沐浴場に関する描写がある。これは、ダンマパーラの事例③で見た註釈 (Ps iii.36) とほぼ同じ文章に、復註 (Ps-ṭ Be ii.20) による補足部分を組み込んだものであることから、ダンマパーラの共業説が上座部教団公認の概念として評価・継承されたことが分かる。

そこには、宝石でできた喜ばしい階段の石面どももあり、魚や亀がおらず、無垢の水が水晶のような諸々の沐浴場があって、それを享受する生き物たちの共業によって (tadupabhogisattānaṃ sādhāraṇakammunā) よく設置され、よく整備されている。(Sp-ṭ Be i.256)

② 〈コーサラ国王の前兆夢〉 *Āṅguttaranikāya* (AN iii.240) にある菩薩の五大夢を註釈するにあたって、ブッダゴーサは、夢の原因を四種類挙げる。そのうちの一つ、「前兆夢」を解説する際に、二つの事例を示す。

前兆に基づいて [夢] 見ている者は、福・非福 [業] によって、発生しようとしている利得・損失の前兆からなる夢を見る。菩薩の母が息子を得る前兆を [夢に見る] ように、コーサラ王が十六夢を [見る] ように……。 (Mp iii.316, cf. Sp iii.520, Vibh-a 407)

Mahāsupinajātaka (Ja no.77, Ja-a i.336-342) に出るコーサラ国王の十六夢は、世尊の解釈に従えば、未来に様々な天変地異が起り、人々の寿命やモラルの退廃、不正の数々が起こることを意味している。サーリプッタは、この Mp に対する復註で、王の夢が共業によると説明するのである。

コーサラ国王のように、世間の利得や損失を相 (前兆) とする夢を見る者は、すべての生き物の共業の威力によって (sabbasattasādhāraṇakammānubhāvena) 見ると理解されるべきである。(Mp-ṭ Be iii,69 = Sp-ṭ Be ii,312 [Ie ii,235])

集団的行為の影響が個人に対して特殊な夢の形で現れるという観念は珍しいが、ここでは、夢が示唆する現実世界の現象も含めてすべて共業の影響と考えられるだろう。このように、12世紀のサーリブッタの文献では、ダンマパーラと同様に「共業」の働きが積極的に認められ、その適用範囲は一層広がっている。

4. ニャーナアビウンタ

Dīghanikāya の Subhasutta に登場するスバという人物 (DN i,204, cf. MN iii,202) に因んで、ブッダゴーサの註釈では、吝嗇家のスバの父親が犬に再生し、世尊に吠えたてたとき、世尊は、「君は、以前にも『お前、お前 (bho bho)⁸⁾』と私を侮蔑して、犬として生まれ、今また吠えて、[今度は] 無間地獄に落ちようとしている」(Sv ii,384, cf. Ps v,9) と説いた、という逸話が記されている。ダンマパーラの復註 (Sv-ṭ i,501) は、この箇所と言及しないが、ビルマのニャーナアビウンタ (Ñāṇābhivamsa) が A.D.1800 年頃に著した新註 *Sādhuvilāsini* (Sv-abhinavaṭṭikā) には、吝嗇と侮蔑語の両方が犬に再生する原因だと述べる。

そのように再生するのがその両者 (布施をしないこと・侮蔑の言葉) の共通の結果 (sādhāraṇa-phala) である。つまり、功德の果報は、共業によっても生じたものである。異熟果のように一つの業によってのみというわけではないと理解されるべきである。(Sv-abhinavaṭṭikā Be ii,403)

「共果 (sādhāraṇa-phala)」という新しい概念が見られる点も興味深い。果報の共有、業の結果を他者とシェアするという意味ではなく、別々の行為でありながら、共通の結果を (あるいは共同して結果を) もたらす業という意味で「共業」という術語が使用されている点が注目される。

5. まとめ

1. 説一切有部では既に大毘婆沙論において、降雨の現象や地獄などが「一切有情の共の増上果」であるとされ、俱舍論では、月と太陽を載せて運ぶ風が「すべての生き物の共業」によると考えられている⁹⁾。これらは、上で見たダンマパーラの解釈と符合する。ダンマパーラの活動年代がブッダゴーサ直後の5世紀頃であるとすると、俱舍論制作の時代とも重なる。上座部の文献における共業の使用

は、説一切有部の影響かどうかは不明であるが、最初にダンマパーラがインドから導入したことは確実である。南インド出身とされるダンマパーラが上座部大寺派に持ち込んだと考えられる観念や知識については、これまでも指摘してきたが、共業もその一つに加えられるだろう。

2. 業果の共有を承認しない立場から「共業」を拒否した上座部の伝統の中で、ダンマパーラは共業を用いることに躊躇う様子がない。しかし、ここで注意すべきは、「それを享受して生きる生き物たちの (tadupajivīnaṃ sattānaṃ)」、[そこに再生する生き物たちの (tattha nibbattanakasattānaṃ)」、[それを享受する生き物たちの (tadupabhogisattānaṃ)』という、共業の修飾表現である。つまり、それらの現象の原因が、そこに生を受けてそれらを享受するすべての生き物にあることが明示されているのである。業果の共有とは、決して、不特定の生き物が利益のおこぼれを与ったり、無関係な損害を被ったりするものではない。そこでは、単独であれ集団であれ、自らが招いた業の果報を行為者自身が受け入れなければならないという自業自得の原則が保たれている。その意味で、ダンマパーラが導入した共業は、Kv やブツダゴーサに代表される上座部大寺派の思想的立場を裏切ることにはならない。

3. 共業の概念は、様々な仏教文献に散見されるものの、厳密な定義や明確な規定が存在せず、体系的に議論されることがなかった。そのことから、共業は学術的教理的枠組みの外で生まれ、事実上、説明不要の共通認識として教団を越えて広く仏教徒に受容され、意味や機能の範囲についての理解も随意に拡散していたことが伺える。ダンマパーラ、マハーナーマ、さらに、12世紀のサーリプッタや近代ビルマの学僧が著した文献における事例が示す通り、多様な解釈を認めながら、上座部は共業を確実に継承してきた。

こうした共業をめぐる文献的事実を整理しながら、現代の上座部仏教圏において社会や自然環境の変化・影響を共有する共同体の仕組みを説明する観念、つまり、Group/Collective/Communal/Socio-Karma と呼ばれる観念への繋がりを明らかにすることが可能となる。

1) 車宮 (rathavimāna) については、PED, s.v. vimāna, 7 参照。しかし、日月と vimāna と devaputta の関係は混乱している。As iv.54 では、「天子たる月の宮殿 (candassa devaputtassa vimānaṃ) が『月輪』と名付けられる」という。Sv iii.866-867 によれば、月はマニ宮 (maṇivimāna) の中に、太陽は黄金宮 (kanakavimāna) の中に住まうとされる。日月が vimāna や馬車によって運ばれ、天の軌道をめぐるという観念については、定方

晟『須弥山と極楽—仏教の宇宙観—』講談社現代新書, 1973, p.29f., 『インド宇宙誌』春秋社, 1985, p.104f., 後藤敏文「Asvin と Nāsatya」『印度學佛教學研究』39,2, 1991: 982-977 等参照。

2) 但し, MN i.337 と同じ偈の Th 1190 に対するダンマパーラの註釈 (Th-a iii.172) は, 上述の Ps ii.422 と同文であり, 共業に言及しない。

3) 施設論 [1538] vol.26,529 では, これらの場合は「龍の歡喜」が原因とされる。

4) As iv.38 (p.312) における, 「[眼は] 色との接触到に適した大種の淨色を特徴とする」に対し, アーナングの復註 (As-mṭ Be 147) では, 「色において, または色に対して接触するという意味 (rūpe rūpassa vā abhigāto ti attho)」という説明しかなされていない。

5) Vism-mṭ と As-anuṭ とに, 他文献にない同一表現が見られることは, 著作問題を考える上で重要なポイントになると思われる。ダンマパーラの著作の真偽は不確定だが, 小部7経の註釈者とアビダンマ復々註の作者の関連については Oskar von Hinüber: *A Handbook of Pāli Literature*, Berlin 1996/New Delhi 1997, sec. 360, 364, 366 参照。ただし彼は sec.366 で Sp-pt が As-mṭ に言及していると指摘しているが, Sv-pt の誤り。そこで重要なのは Sv-pt の著者ダンマパーラが As-mṭ に言及する際, Ānandāriyo avoca という異例の Aor. を用いた点である。つまり DN の復註はアーナング作 As-mṭ よりも遅く, 作者はアーナング「先生」を直接知っていたか, 少なくとも近い過去の人物とみなしていることが分かる。アーナングの弟子のダンマパーラがアビダンマ復々註を制作したことと重ねると, 小部7経の註釈者とアビダンマ復々註の作者と三つのニカーヤ復註の作者が一層親近性をもつ。

6) 諸根と結びつかない色の具体例としては, 例えば, Vism xx.73: bahiddhā anindriyabaddham aya-loha-tipu-sisa-suvaṇṇa-rajata-muttā-maṇi-veḷuriya-saṅkhasilā-pavāḷa-lohitāṅga-masāragalla-bhūmi-pāsāṇa-pabbata-tiṇa-rukkha-latādibhedam vavaṭṭakappo paṭṭhāya uppajjanakarūpaṃ。

7) サーリプッタの著作研究としては, Primoz Pacenko: “Sāriputta and his works”, JPTS 23, 1997: 159-179 が挙げられる。

8) 感嘆詞 bho が犬の鳴き声の擬音語と重なる。古代インドで表現される犬の鳴き声については W.Bollée: *Gone to the dogs in ancient India*. München 2006: 43-46 に詳しい。この事例については p.45 にある。

9) 佐々木閑「仏教の自然観」『財団法人松ヶ岡文庫研究年報』20, 2006, p.21, 25 参照。大毘婆沙論 [1545] vol.27, 60b では, ある種の畜生と餓鬼が, 煙・雲・雨・寒熱等を起すことについて, 「有天能興雲, 有天能降雨, 有天作寒熱, 有天起風雷」という経文 (SN iii.254 に対応! 上記⑤) を引用し, 降雨等は直接的には龍の加行としながらも, 実は「一切有情の共の増上果」であると述べる。さらに, 地獄等も同じとみならず, 日月の運行については, Abhidharmakośabhāṣya (P) p.165 に「さて, これら月と太陽とは, 何の上に置かれているのか。風の上に, 空中に, すべての生き物の共業の増上力 (sarvasattvasādhāraṇakarmādhīpatya) によって起し出された風どもが, 渦巻きのようにスメール [山] を巡る」とある。

〈キーワード〉 共業, 自然, ダンマパーラ, マハーナーマ, サーリプッタ

(こども教育宝仙大学教授, Ph.D.)